選択的関連付け課題による理想自己と Feared Selves の検討^{1,2}

名古屋大学 林幹也³

Ideal and feared selves in the selective self-reference task

Mikiya Hayashi (Department of Educational Psychology, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601)

It is argued that high mnemonic performance demonstrated in the ideal-self reference task did not unequivocally show that richness and organization of knowledge in the ideal self were responsible for performance. Accordingly, this study used goal-evaluation task, in which the participants classified each trait into either "want to be" or "not want to be" category. In this way, richness and organization of knowledge in the ideal and "feared selves" were compared. In Experiment 1, recall performance under goal evaluation condition was compared with that under actual and ideal self-reference conditions, and no significant difference was found. In Experiment 2, the task-facilitation paradigm was used to test whether the goal evaluation task was performed by selectively accessing the two sets of self-knowledge. As a whole, results suggested that the task required selective access to both selves, and reflected richness and organization of knowledge for both ideal and feared selves.

Key words: self-reference task, ideal self, feared self, goal evaluation.

現在まで自己知識の性質や構造を検討するに際して、自己関連付け課題 (self-reference task) が非常に大きな役割を果たしてきた。この手続きで符号化された語が意味的处理や形態的处理を行った語よりも再生成績に優れる現象を自己関連付け効果 (Rogers, Kuiper, & Kirker, 1977) と呼び、現在まで繰り返し確認されている。その生起原因に関して多くの解釈が提出されているのであるが、もっとも一般的な解釈としては、自己が豊富で体制化された知識構造であるために、記銘語をそれに関連付けることによって多重的な検索ルートが形成されるためであるとされる (Symons & Johnson, 1997)。つまり実験室における記憶実験課題である自己関連付け課題は、自己の性質を記憶実験パラダイムによって検討可能にする副次的効果を有していたのである。

ところでこれらにおいて検討されている自己は個人の“現実の自己”であるが、個人が記憶内に有していると考えられる自己知識は現実の自己だけではない。とくに Higgins (1987) によるセルフ・ディスクレパ

ンシー理論では個人が理想としてそうありたいと考える自己像である理想自己が、また Carver, Lawrence, & Scheier (1999) や Ogilvie (1987) では個人がそうありたくないと考える自己像 (feared selves; undesired selves) などが個人の感情生活にとって重要なものであると主張されている。そこでこれらの自己像も現実自己と同様の知識構造なのかとの疑問が生ずる。これに関して例えば堀内 (1999) は理想自己に対して現実自己と同様の関連付け課題を行い、同様の高い再生成績を得た。この結果に対して上述の解釈を適用すれば、個人が理想としてそうありたいと考える自己像は現実自己と同様の豊富で体制化された知識構造であることが示唆されていることになる。しかしながら理想自己関連付け課題は現実自己関連付け課題とは異なる処理である可能性があり、そのため現実自己の場合と同様に試行後の再生成績の高さによって理想自己の知識構造としての量的豊富さと体制化の程度を論じることができないのではないかと考えられる。

というのも速く正確に遂行するように教示された理想自己関連付け課題を行う際の被験者は、教示通りに理想自己をイメージしてそれに適合するか判断するのではなく、実際には呈示語が個人的に望ましいものである場合に Yes 反応を行い、個人的に望ましくないものである場合に No 反応を行う可能性もまた考えられる。また理想の自己像との適合を基準とするだけで

¹ 本研究は、2000 年度に大阪教育大学教育学研究科に修士論文として提出したものを加筆修正したものである。

² 本研究の一部は、日本心理学会第 65 回大会で発表した。

³ 本研究を御指導くださいました大阪教育大学白井利明教授に深く感謝申し上げます。また、東海女子大学の堀内孝氏に貴重な御示唆を頂いたことを感謝いたします。

はなく、実際には理想自己と逆の誘因価を有するであろう *feared selves* との適合を基準として判断する場合も考えられる。もしそうであれば、理想自己関連付け課題の再生成績は個人がそうありたいと望む自己像のみの知識としての豊富さや体制化の程度を示していないことになる。仮に *feared selves* について検討するために同様の課題を行ったとしても同様の問題点が生ずる。これに関して遠藤 (1987) の実験1では、反応の種類によって異なる自己知識に対する関連付けが行われるとの前提で理想自己関連付け課題を行っている。この手続きでは“記銘語が理想の自己像に当てはまりますか”と教示するのではなく、“記銘語に対してそうありたいと感じる (Goal) か、そうありたくないと感じる (Avoidance) か、あるいは考えたことがない (Indifference) か判断してください”と教示する。この課題を行った後に記銘語の再生テストを行ったところ、その再生率は $\text{Goal} > \text{Indifference} > \text{Avoidance}$ であり非対称性を示した。遠藤はこの結果に対して、“こうありたい”と望む領域について人は豊かなそして高度に構造化された表象体系をもつという仮説を支持する”、“こうありたくない”というイメージに関する情報 (否定情報) の貯蔵量が少なく、符号化の段階で精緻化が十分になされなかったことが考えられる”と述べている。つまりこの手続きにおいては Goal 反応の際には理想自己に対して、Avoidance 反応の際には *feared selves* に対して選択的な関連付けを行うとの前提が存在している。ただし再生成績を意味的処理条件や現実自己関連付け条件と比較していないため、理想自己と *feared selves* がどの程度豊富で体制化された知識構造であるのか不明である。また試行前に“被験者自身の理想像に基づいて”判断するようにとの教示を行っているため、選択的な関連付けが行われたのかどうか明らかではない。

すなわち現時点において、理想自己関連付け課題が理想自己という知識構造への関連付けを要求する課題であるのか、あるいは呈示語の個人的な望ましさを評価する課題であるのか、またそれによって理想自己だけではなく *feared selves* に対する関連付けをも行う課題であるのかが明確になっていないため、理想自己あるいは *feared selves* が現実自己と同様に豊富で体制化された知識構造であるのかどうか明らかとなっていないのである。

そこで本研究では、単に呈示語に対して被験者が“そうありたい”と感じるか“そうありたくない”と感じるかできるだけ速く正確に判断を行う課題 (目標評価判断課題) を設定する。ただし理想像に基づいて判断するようにとの教示は行わない。遠藤 (1987) に従い、これによって被験者は理想自己と *feared selves* に対して選択的に関連付けを行うと前提する。この処理による再生成績を、現実自己関連付け条件および現

実自己関連付け条件と同様の教示・反応で行われる理想自己関連付け条件および意味的処理条件と比較することにより、理想自己と *feared selves* が現実自己と同様の豊富で体制化された知識構造であるのか改めて検討することを目的とする。

実験 1

目標評価判断条件、意味的処理条件、現実自己関連付け条件および理想自己関連付け条件の再生成績を比較する。目標評価判断条件において被験者が単一の自己像を自動的にイメージすることを避けるため、各処理条件は被験者間要因とする。

方法

実験計画 4 (処理条件) $\times$ 3 (反応の種類)。個別実験形式である。処理条件は被験者間要因である。1人の被験者は1種類の課題のみを行った。

被験者 大学生・大学院生計 78 名が実験に参加した。課題の種類は現実自己関連付け課題、目標評価判断課題、理想自己関連付け課題、意味的判断課題の 4 種類であり、それぞれ 21 名、23 名、18 名、16 名を割り当てた。

材料 青木 (1971) による性格特性語リストから特定の領域に偏らないように 90 語 (ポジティブ語、中性語、ネガティブ語各 30 語ずつ) を抽出した。

機材 Apple 社製マイクロコンピュータ Macintosh Performa 5440 と ADB キーボードを用いた。また刺激呈示および反応の計測に SuperLab 1.68 を用いた。

手続き CRT モニタに刺激語が呈示され、被験者はそれに対して手元の三つのキーで反応する。判断基準は、現実自己関連付け課題では“呈示語はあなたが思うあなたの自己像に当てはまりますか”、目標評価判断課題では“呈示語に対してそうありたいと感じますか (Approach)、そうありたくないと感じますか (Avoidance)、もしくはどちらともいえないと感じますか (Failed)”。理想自己関連付け課題では“呈示語はあなた自身の理想の自己像に当てはまりますか”、意味的判断課題では“呈示語の使用頻度はどの程度ですか”である。被験者はできるだけ速く正確に判断し、三つのキーのうちの一つを押す。被験者が判断を終えると 1500 ms をおいて次の刺激語が呈示される。刺激語の呈示順は被験者内でランダム化された。また判断内容と三つのキーの対応に関しては各処理条件ごとに 6 パターンが存在し、各被験者はそのうち 1 パターンをランダムに割り当てられた。リストの語すべてに対する判断を終えた後、5 分間の挿入課題 (1000 から 3 桁の数を減じる計算) を挟み、筆記による 10 分間の自由再生を行った。

Table 1
Mean and standard deviation of recall scores as a function of encoding task

Tasks	Actual self reference			Goal-evaluation			Ideal self reference			Semantic		
	Yes	Neutral	No	Approach	Failed	Avoidance	Yes	Neutral	No	High	Mid	Low
Mean	.21	.12	.18	.18	.11	.12	.22	.11	.11	.11	.07	.04
SD	.09	.06	.09	.09	.12	.08	.10	.08	.08	.06	.07	.06

結果と考察

現実自己関連付け条件で Yes 反応を行わなかった被験者が 1 名, Neutral 反応を行わなかった被験者が 1 名, 目標評価判断条件で Failed 反応を行わなかった被験者が 1 名存在したため以上 3 名を除外し以下の分析を行った。まず各条件の各反応における平均再生率と SD を算出し (Table 1), 再生率を角変換した後 4 (処理条件) × 3 (反応の種類) の分散分析を行った (処理条件は被験者間要因である) ところ, 処理条件と反応の種類それぞれの主効果が有意であった ($F(3, 71) = 8.1, p < .001$; $F(2, 142) = 25.3, p < .001$)。交互作用は有意ではなかった ($F(6, 142) = 1.9, ns$)。処理条件の主効果について多重比較⁴を行ったところ, 各条件の差は現実自己関連付け = 理想自己関連付け = 目標評価判断 > 意味的判断となっていた。目標評価判断条件と現実自己関連付け条件との間には 10%水準の差の傾向が見られたが理想自己関連付け条件との間には有意差は見られなかった。目標評価判断条件において再生率は非対称性を示しており, Avoidance 反応の再生率が Approach 反応の再生率よりも低い点について遠藤 (1987) の結果と合致し feared selves は理想自己に比べて量的に乏しい知識構造であると考えられる。Avoidance 反応を得る特性語はとくにネガティブな感情価を有している可能性が高いため再生成績が低くなったと考えることも可能であるが, この場合でも意味的処理条件での最も高い再生率を超える成績を示しているため, 一定の量的豊富さをもち体制化された知識構造であると考えてよいであろう。また目標評価判断条件と理想自己関連付け条件は再生率が同程度で, かつ再生率パターンが肯定的反応 > 中性的反応 = 否定的反応の非対称性を示している点で類似している。そこで目標評価判断条件のみの 1 要因分散分析を行ったところ反応の種類的主効果が有意であり ($F(2, 42) = 4.3, p < .05$)、多重比較の結果 Approach 反応 > Failed 反応 = Avoidance 反応の差が有意であった。同様に理想自己関連付け条件のみで 1 要因分散分析を行ったところ反応の主効果が有意であり ($F(2, 34) = 11.9, p < .001$)、多重比較の結果 Yes 反応 > Neutral 反応 = No 反応の差が有意であった。

さらに目標評価判断条件と理想自己関連付け条件のみで再生率を従属変数として 2 (処理条件) × 3 (反応の種類) の分散分析を行ったところ, 反応の種類の主効果は有意であった ($F(2, 76) = 14.5, p < .001$) が交互作用は得られなかった ($F(2, 76) = 0.8, ns$)。また処理条件の主効果は有意ではなく ($F(1, 38) = 0.4, ns$)、両条件はやはり同程度の再生成績を示したと考えることができる。以上の分析から, 理想自己関連付け課題においても目標評価判断課題において仮定されている処理と同様の処理が, すなわち Yes 反応の場合は理想自己に対する選択的な関連付けが, No 反応の場合は feared selves に対する選択的な関連付けが行われた可能性も考えられる。

以上のように目標評価判断課題の Approach 反応の再生成績が現実自己関連付け課題のそれと同程度であったことから, 理想自己はほぼ, 現実自己と同程度に豊富で体制化された知識構造であるといえるだろう。また Avoidance 反応の再生成績は Approach 反応の再生成績に比べて低いことから, feared selves の量的豊富さおよび体制化の程度は理想自己のそれに比べて相対的に低いと考えることができる。しかしながらこの結果は目標評価判断課題の Approach 反応において理想自己に対する選択的関連付けが行われ, Avoidance 反応において feared selves に対する選択的な関連付けが行われているとの前提を必要としており, この前提はまだ検証されていない。すなわち理想自己のみ, あるいは feared selves のみをプロトタイプとした関連付けを行った可能性も否定できないのである。本研究の主旨として理想自己と feared selves に対する選択的関連付けが確実である必要があるため, 実験 2 では, 判断の際に得られる情報量の差に注目した課題促進パラダイム (Klein, Loftus, & Burton, 1989; Klein & Loftus, 1993) を用い, 目標評価判断課題において実際に選択的関連付けが行われているか検証する。

実験 2

本実験の目的は目標評価判断課題が判断の種類によって異なる自己知識に対して選択的に関連付けを行っているのか検証することである。ここで用いられる課題促進パラダイムは同一の性格特性語に対する先行課題とターゲット課題から構成されており, 先行課題の

⁴ 本研究における多重比較は全て LSD 法で行われた。

遂行において得られる情報とターゲット課題の遂行において必要とされる情報との重複が大きい場合は重複の小さい場合に比べて、ターゲット課題が短い時間で遂行可能となるとの前提が存在する (Klein et al., 1989; Klein & Loftus, 1993)。

目標評価判断課題で理想自己と feared selves に対して選択的関連付けが行われているのであれば、関連付けられた自己知識が活性化されると考えられる。ここで、理想自己に関する特性知識は feared selves に関する特性知識に比べて、現実自己特性知識との重複量が大きい (遠藤, 1987⁵) (Figure 1)。また、現実自己関連付け課題を行うためには現実自己に関する特性知識を参照する必要があるが、現実自己関連付け課題をターゲット課題として行う場合、遂行に必要な知識は先行する目標評価判断課題の反応によって部分的に得られている可能性がある。これらを前提すると本実験の仮説は以下ようになる。

仮説(1)：目標評価判断課題において選択的関連付けが行われているのであれば、先行目標評価判断課題で Approach 反応を得た場合は Avoidance 反応を得た場合に比べてターゲット現実自己関連付け課題の判断時間の促進量が大きいであろう。なぜなら先行目標評価判断課題で Approach 反応を得た場合は理想自己特性概念が活性化されており、それに対して Avoidance 反応を得た場合は feared selves に関する特性概念が活性化されているのであるが、本実験の前提によれば、前者は後者に比べて現実自己特性概念との重複が大きい (Figure 1)。したがって先行課題で Approach

Figure 1. A diagram representation of two overlaps: actual and ideal versus actual and feared selves, suggested by Endo (1987).

⁵ 遠藤 (1987) は実験 3 において、記銘語リストに対して現実自己関連付け課題を行わせた後に、同じリストの語に対して個人的にそうありたいとを感じるか、そうありたくないと感じるか、あるいは考えたことがないか評定させた。その結果、現実自己関連付け課題で Yes 反応を行った語が個人の理想自己に当てはまる頻度は負の理想自己に当てはまる頻度よりも高く、それに対して No 反応を行った語が個人の理想自己に当てはまる頻度は負の理想自己に当てはまる頻度よりも低かった。

反応を得た場合は Avoidance 反応を得た場合に比べて、その時点でターゲット現実自己関連付け課題の遂行に必要な特性概念がより多く活性化されているため、ターゲット現実自己関連付け課題の遂行において新たに参照しなければならない知識量が少なくなり、その結果判断時間が相対的に短くなるからである。

仮説(2)：これに対して目標評価判断課題で反応の種類による選択的関連付けが行われていないか、あるいは単一の自己知識のみをプロトタイプとした関連付けが行われているのであれば、先行目標評価判断課題でどちらの反応を得た場合でも、ターゲット現実自己関連付け課題の遂行に必要な知識は同程度に活性化されていることになるため、判断時間の促進は同程度となるであろう。

方法

実験計画 課題呈示パターンは、先行課題の種類 3 (現実自己関連付け課題、目標評価判断課題、追唱課題)⁶ × ターゲット課題の種類 3 (現実自己関連付け課題、目標評価判断課題、追唱課題) = 9 通りである。これらのうち、“先行目標評価判断課題 → ターゲット現実自己関連付け課題”の組み合わせを呈示パターン A とし、“先行現実自己関連付け課題 → ターゲット目標評価判断課題”の組み合わせを呈示パターン B とする。この 2 呈示パターンにおいて被験者は目標評価判断課題と現実自己関連付け課題の両方を行うため、この二つの呈示パターンに対して割り当てられる呈示語は結果的に、(a) Approach 反応を得て現実自己に当てはまる語、(b) Approach 反応を得て現実自己に当てはまらない語、(c) Avoidance 反応を得て現実自己に当てはまる語、(d) Avoidance 反応を得て現実自己に当てはまらない語の 4 種類に分類される。語種類 (a) (b) が呈示された場合の呈示パターン B における先行現実自己関連付け課題の平均判断時間から、同じく語種類 (a) (b) が呈示された場合の呈示パターン A におけるターゲット現実自己関連付け課題の平均判断時間を減じれば、その値は先行目標評価判断課題で Approach 反応を得た直後のターゲット現実自己関連付け課題判断時間の促進量となる。同様に語種類 (c) (d) が呈示された場合の呈示パターン B における先行現実自己関連付け課題の平均判断時間から語種類 (c) (d) が呈示された場合の呈示パターン A におけるターゲット現実自己関連付け課題の平均判断時間を減じれば、その値は先行目標評価判断課題で Avoidance 反応を得た直後のターゲット現実自己関連付け課題判断時間の促進量となる。仮説(1)は前者は後者に比べて大きいというものである。したがって比較方法は 2

⁶ 被験者にターゲット課題の種類を予測されることを防ぐために追唱課題 (呈示語を読んでキーを押す課題) を設定し、3 × 3 の課題呈示パターンとした。

Table 2
Mean and standard deviation of the judgmental latency (ms)
for primal and target self-reference task and goal-evaluation
task for the 4 word types

		Word type			
		Approach		Avoidance	
Primal task		Yes	No	Yes	No
Self-reference	Mean	1 438	1 539	1 505	1 479
	SD	288	286	325	340
Goal-evaluation	Mean	1 212	1 332	1 278	1 168
	SD	238	244	278	293
Target task					
Self-reference	Mean	1 037	1 055	1 278	1 204
	SD	345	294	349	308
Goal-evaluation	Mean	821	1 062	958	1 054
	SD	215	240	203	254

(先行目標評価判断課題の Approach 反応と Avoidance 反応)×2 (ターゲット現実自己関連付け課題の Yes 反応と No 反応), 従属変数は以上に述べたターゲット現実自己関連付け課題の促進量である。いずれも被験者内要因である。

被験者 大学生・大学院生 24 名。

材 料 青木 (1971) から特定の性格領域に偏らないようにポジティブ語とネガティブ語各 90 語ずつを抽出して用いた。

手続き 個別実験形式である。各試行において、被験者は呈示語 1 語に対して先行課題とターゲット課題を連続して行う。各試行では最初に CRT 中央に先行課題の質問文が呈示され、1 000 ms 後、その下に刺激語が呈示される。被験者はキーを押して判断を行う。判断を終えると先行課題の質問文は消え、1 000 ms 後、刺激語の上にターゲット課題の質問文が呈示され判断を行う。ターゲット課題の質問文が呈示されてからキーが押されるまでの時間がターゲット課題に要する判断時間である。2 000 ms 後に次の試行が始まる。課題の種類は三つである。現実自己関連付け課題では被験者は刺激語が自分の現実自己に当てはまるかどうか 2 択の判断をする。目標評価判断課題では被験者は刺激語が表すような性格でありたいかありたくないか 2 択の判断をする。追唱課題では刺激語を声に出さずに読み、二つのキーのうち任意のキーを押す。質問文はそれぞれ、“当てはまる/当てはまらない”, “そうありたい/そうありたくない?”, “読んでください” であ

る。被験者はできるだけ速く正確に判断することを求められた。先行課題とターゲット課題が同種類である場合は、先行課題に対して判断した内容を思い出し同じキーを押すように教示された。反応の種類に対するキーの割り当ては被験者間でカウンターバランスされた。九つの呈示パターンそれぞれに対してポジティブ語 10 語、ネガティブ語 10 語ずつ割り当てたリストを五つ作成し、被験者はそのうちの一つのリストにランダムに割り当てられた。リスト内の試行順は被験者内でランダム化された。

結果と考察

まず分析対象となる 2 種類の課題呈示パターン内における課題のどれか一つ以上において、2 種類の反応のうちの片方を行わなかった被験者 8 名を分析から除外した。また各被験者ごとに 2 500 ms 以上のターゲット課題判断時間を外れ値として除外 (7.3%) した後、語種類(a)から(d)それぞれの場合について、呈示パターン A と B における現実自己関連付け課題および目標評価判断課題が先行課題として呈示された場合とターゲット課題として呈示された場合の平均反応時間および SD を算出した (Table 2)。次に語種類(a)から(d)それぞれでのターゲット現実自己関連付け課題判断時間の促進量を計算し、それらの平均値および SD を算出した後に 2×2 の被験者内分散分析を行った結果 (Table 3)、先行目標評価判断課題の反応の種類の主効果のみが有意であった ($F(1, 15) = 7.0, p < .05$)。ターゲット現実自己関連付け課題の反応の種類的主効果および交互作用は有意ではなかった ($F(1, 15) = 1.3, ns$; $F(1, 15) = 0.1, ns$)。

⁷ 質問文である“当てはまる/当てはまらない”, “そうありたい/ありたくない”は、左右のキー配置に干渉することを防ぐためにスラッシュの前後を上下に配置して呈示した。

Table 3
Mean and standard deviation of the facilitation
of the judgment response time (ms) for the
target real self-reference task after the
primal goal-evaluation task

Response for the primal task	Approach		Avoidance	
	Yes	No	Yes	No
Response for the target task				
Mean	401	484	227	275
SD	213	236	383	339

以上の結果は、目標評価判断課題において Approach 反応を行う場合に活性化する特性概念と現実自己に関する特性概念との重複が、Avoidance 反応を行う場合のそれよりも大きいことを示している。したがって目標評価判断課題では反応の種類によって互いに異なる知識に対して選択的関連付けを行っているとの仮説(1)を支持する結果であるとともに、単一の自己知識をプロトタイプとした関連付けを行っているとの対立仮説を否定する結果となった。これによって実験1の目標評価判断課題の再生率は、反応の種類によってそれぞれ理想自己と feared selves に対して選択的に関連付けた結果であるとみなすことができる。

総合的考察

本研究の目的は、理想自己関連付け課題が想定した通りの処理を行っていない可能性に注目したうえで、理想自己と feared selves が現実自己に比べてどの程度の量的豊富さと体制化の程度を有した知識構造であるか改めて検討することであった。そのために実験1では自己像全体の表象を要求せずに関連付けを行う目標評価判断条件を設定したところ、この条件の再生成績は現実自己関連付け条件に準じ理想自己関連付け条件と同程度であり、また意味的处理条件より優れていた。目標評価判断条件と理想自己関連付け条件の再生率パターンは類似したものであり、両者とも非対称性を示した。実験2では目標評価判断課題の選択的関連付けを検証するために課題促進パラダイムを用い、先行目標評価判断課題で Approach 反応を得た場合と Avoidance 反応を得た場合で、直後のターゲット現実自己関連付け課題の判断時間の促進に差が生じるかどうか検証した。結果は目標評価判断課題において Approach 反応と Avoidance 反応で異なる知識構造に対してアクセスしていることを支持するものであった。以上二つの結果から、本研究において目標評価判断課題によって理想自己と feared selves それぞれに対する選択的関連付けが可能となり、理想自己と feared selves それぞれの量的豊富さおよび体制化の程度が現

実自己に比べてどの程度であるか再生率によって明らかになったと考えられる。

この目標評価判断課題における処理のプロセスであるが、態度判断における処理に類似している。Fazio (1986, 1995) は、態度を態度対象とそれに対する評価の連合とみなし、ある態度対象に対する態度判断(評価判断)に要する判断時間を連合の強さおよび態度アクセシビリティの指標としている。すなわち、ある対象に対する“望ましい/望ましくない”との態度判断は、記憶内においてその対象を表す概念と連合した“望ましい/望ましくない”との評価にアクセスすることによって行われると考えられている。目標評価判断課題もこれと同様に対象(性格特性)に対する個人的な評価の態度を問う処理である。そこで個人の自己知識内に“そうありたい(接近)”, “そうありたくない(回避)”との個人的な目標に対する評価を表す概念を仮定すれば、目標評価判断課題は長期記憶内において記銘語に対応した特性概念と連合している評価的概念が二つのうちいずれであるのかを同定する課題であると考えることができる。これを前提とすれば、理想自己と feared selves は二つの評価的概念を中心として体制化された知識構造であり、評価的概念へのアクセスを通じて関連付けが行われたとも推測される。

ただし自己と記憶との関連を扱う実験に見られる問題点が本研究にも残されている。実験1においては記銘語の再生率の高さをそれに関連付けられる知識構造の量的豊富さおよび体制化の程度の指標としているが、この立場が必ずしも完全な了解を得るわけではない。符号化から検索に至るまでのプロセスは複雑であるうえ、現時点では自己関連付け課題の処理プロセスに関する詳細な検討は行われておらず、意味的处理条件に比した記憶促進の原因については数多くの解釈が提出されており見解の一致を見ていない。例えば堀内(1998)は自己関連付け効果の生起原因として多次元意味処理説を主張しておりその原因は自己知識の豊富さではないとする。別の例として Ferguson, Rule, & Carlson (1983) では記銘語に対する社会的望ましさの判断を行うだけで自己関連付け条件と同程度の再生成績が得られている。これらの立場からみれば再生成績の高さは自己知識の豊富さや体制化の程度と何の関係も有していないことになる。しかしこれらの可能性を差し引いたとしても目標評価判断課題が反応の違いによって異なる知識を参照しているであろうことが反応時間促進量の差から示されており、したがって自己関連付け課題において自己知識への関連付けが行われていないと考えることはできないであろう。

現在の自己研究においては、特定の自己特性概念のアクセシビリティの高さと行動や感情との関連が検討されているが、それらの特性概念がどのように自己知識として構造化されているのかに関して十分な説明が

行われているわけではない。例えば self-regulation に関する議論 (Higgins, 1997) では、理想自己特性概念および義務自己特性概念のアクセシビリティと、特定の感情 (Higgins, Shah, & Friedman, 1997) や行動 (Förster, Higgins, & Idson, 1998) の生起との関連性を問題としてきたのであるが、これらの特性概念がどのようなネットワークを形成しているのかに関して十分に検討されていないようである。本研究では記憶実験パラダイムを用いてこれを検討したが、異なるアプローチも可能であろう。例えば当該の自己知識に適合する特性語をプライムとして呈示し、ターゲットとなる特性語がその自己知識に適合するか否かによってターゲットに対する語彙判断などの反応時間が促進されるか検討する意味的プライミングパラダイムの援用などが考えられるだろう。

引用文献

- 青木孝悦 1971 性格表現用語の心理-辞典的研究 455 語の選択, 分類および望ましさの評定 心理学研究, **42**, 1-13.
(Aoki, T. 1971 A psycho-lexical study of personality trait words: Selection, classification and desirability ratings of 455 words. *Japanese Journal of Psychology*, **42**, 1-13.)
- Carver, C. S., Lawrence, C. W., & Scheier, M. F. 1999 Self-discrepancy and affect: Incorporating the role of feared selves. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 783-792.
- 遠藤由美 1987 特性情報の処理における理想自己 心理学研究, **58**, 289-294.
(Endo, Y. 1987 The ideal self in processing trait information. *Japanese Journal of Psychology*, **58**, 289-294.)
- Fazio, R. H. 1986 How do attitudes guide behavior? In R. M. Sorrentino & E. T. Higgins (Eds.), *The handbook of motivation and cognition: Foundation of social behavior*. New York: Guilford. Pp. 204-243.
- Fazio, R. H. 1995 Attitudes as object-evaluation associations: Determinants, consequences, and correlates of attitude accessibility. In R. E. Petty & J. A. Krosnick (Eds.), *Attitude strength*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. Pp. 247-282.
- Ferguson, T. J., Rule, G. R., & Carlson, D. 1983 Memory for personality relevant information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 251-261.
- Förster, J., Higgins, E. T., & Idson, L. C. 1998 Approach and avoidance strength during goal attainment: Regulatory focus and the "goal looms larger" effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1115-1131.
- Higgins, E. T. 1987 Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319-340.
- Higgins, E. T. 1997 Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, **52**, 1280-1300.
- Higgins, E. T., Shah, J., & Friedman, R. 1997 Emotional responses to goal attainment: strength of regulatory focus as moderator. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 515-525.
- 堀内 孝 1998 自己認知の多次元性と自己関連付け効果 心理学研究, **68**, 484-490.
(Horiuchi, T. 1998 The multidimensional property of the self and self-reference effect. *Japanese Journal of Psychology*, **68**, 484-490.)
- 堀内 孝 1999 現実自己, 理想自己, および, 社会的自己における自己関連付け効果 心理学研究, **70**, 128-135.
(Horiuchi, T. 1999 Self-reference effect and real, ideal, and social selves. *Japanese Journal of Psychology*, **70**, 128-135.)
- Klein, S. B., & Loftus, J. 1993 The Mental representation of trait and autobiographical knowledge about the self. In T. K. Srull & R. S. Wyer, Jr. (Eds.), *Advances in Social Cognition. Vol. 5. The mental representation of trait and autobiographical knowledge about the self*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum. Pp. 1-50.
- Klein, S. B., Loftus, J., & Burton, H. A. 1989 Two self-reference effects: The importance of distinguishing between self-descriptiveness judgements and autobiographical retrieval in self-referent encoding. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 853-865.
- Ogilvie, D. M. 1987 The undesired self: A neglected variable in personality research. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 379-385.
- Rogers, T. B., Kuiper, N. A., & Kirker, W. S. 1977 Self-reference and the encoding of personal information. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**, 677-688.
- Symons, C. S., & Johnson, B. T. 1997 The self-reference effect in memory: A meta-analysis. *Psychological Bulletin*, **121**, 371-394.

—2002. 1. 26 受稿, 2002. 9. 7 受理—